

心配して一行は昨日の道を逆戻りすることにした。暑い夏の太陽は容赦なく頭から照りつけていた。みんな汗だくの態だった。昼すぎ頃昨日のじいちゃんがまだ休んでいるのを発見した。よくみると横になって死んでいるではないか、目耳鼻口と所かまわず丸々と太った蛆が顔を所狭しと動き回っているのである。見るに見兼ねて野の花を手折り眼前に供え南無阿弥陀仏と唱えながら手を合わせた。あわれ七十近い老人との最後の別れであった。また、八月二十日頃の早朝かと思う。雨雲の低く垂れこめた日だった。涙と鼻水と一緒にして泣き叫びながら母親を探し求める女の子がいた。見れば知人の娘だ。母親はどうしたと尋ねたら側の人は言う。我が身が一番大事だから足手まといになるものは何でも捨てていこうと暗い中にこの子を置き去りにして東の方へ行つたとのこと。終戦後何年かが経ってからこの子は肉親探しのため日本へやってきた。父親はシベリアから帰ってきていたので奇しくも親子の対面再会の夢は叶えられた。母親はこのことを知ったのかどうかは知らないが、しかし生きて日本へ帰っていたとしてもこの娘に合わせる顔はな

い筈だ。福井県出身の親子のめぐり合わせである。私は新京で越冬し、勤労奉仕隊の中隊長等の仕事をし翌年内地送還の一行とともに帰国したが牡丹江裏の山中において妻子五人を見失った痛手は今も忘れることは出来ない。その後の風の便りみんな死に小高い山裾に葬られているという。

帰国後中学教師として定年までこの道一筋にと務めあげた。現在はボランティア的な仕事に毎日を忙しく動き回っている。

引揚げ者労苦の断片

山形県 鳥海 啓雄

昭和十三年当時十八歳で満鉄社員に採用されて渡満した。十五年に現役で軍隊に三年余、十八年四月満期除隊し入船駅に復職した。二十年六月北鮮の羅津駅に転勤、その頃よりB29の飛来で港周辺の投爆があった。八月九日未明突然空襲警報発令、家の中も昼のように明るく、

照明弾で夜空をこがし、聞きなれない金属音を発し低空で爆撃、停泊中の船舶と交戦中でした。夜明けと共に空爆も終わったが、停泊中の船はマストだけを海面に船首や船尾だけ浮上しているもの、実に悲惨な港内と化していました。その後も編隊で数回港や倉庫、駅構内と爆撃され、十時頃避難命令が出され午後六時まで羅津東方十六キロの地点水源地に全市民集合とのことでした。必需品を持ち、炎天下の山道を昇りはじめたが僅か数キロで目的地に着くのに歩行困難になって、道端に荷物を捨てて。女や子供は歩けない。声を掛け合いながら歩く。その間も飛来し銃撃を受けながら目的地に到着した。夜半に埠頭長より、羅津凶們間の鉄道電話は爆撃により使用不可能で我々は山を越え二十里東方の会寧に向い吉林鉄道局員の指示により行動すること、三日三晩歩き続け、十五日朝、客貨車の混合列車に乗車、十一時頃凶們に到着するヤソ連機の低空からの爆撃機銃掃射。とっさに貨車に飛び降り身を隠すと同時に爆風で吹き飛ばされるような強い衝撃を受けた。客貨車各一両は線路に車輪のみを残しあとかたもなく吹き飛ばされ、他の車両は

大きく傾き多くの人は頭や手足とばらばらで助けようもなく、一瞬の内に数十人死亡した無惨な光景でした。

列車を再編成し夜凶們を出発十六日早朝吉林に到着し日本の敗戦を知った。列車は撫順へ、深夜大連に向かったが、奉天に明日、ソ連軍進駐で列車の運行を禁止され、二十数人で線路づたいに歩き、幾つ目かの駅でようやく明日あたりは列車がくるだろうとのことで駅に一泊し、やっとの思いで大連行きに乗車、十九日夕方大連に到着、同僚と一晩語り合い一夜を過ごした。大連はソ連軍の進駐もなく人影こそ少ないが以前と変わりはないがなかつた。

九月一日非番の夕方欠勤者の代わりに出番を頼まれ出勤、翌朝異状なく交代し六人で帰宅、途中東関町の広場に大勢の中国人が集まっていたが、何も知らないので群衆の中へはいっていったら、日本人だと襲いかかって来たが相手は大勢であるし、とっさに今来た道を引き返したら銃声とともに前の一人が倒れたので近寄ろうとしたら、後ろから押された感じと共に背中に熱い激痛が走った。友人は足を撃たれて歩けないから早く行けと言う。

不運にも連京線と硝子工場の引込線のガード下で引込線には佳石が山積みされ、その石を我々に投下するのでせめてガードまではと頑張ったが立てず、危ないから先に駆けと言われて立ち上がった瞬間一発。そのときはまたかと思っただが痛みは感じないようだった。ただ入船駅にたどりつくことをのみ考えて走ったが道路は人垣で進めず、硝子工場に行けば日本人がいるものと工場へ走った。しかし門は施錠されているので塀を乗り越えて工場内にはいった。ところが日本人どころか誰れ一人いないので事務室へ、中国人数人が石を投げつつ追って来て事務所の硝子戸に投げ付け破片が飛散し、もう逃げ場もなく机の下にもぐって観念した。そのときはじめてワイシャツが真っ赤になり呼吸すると、ジュークジュークと泡が吹き出るのに気づいた。机の下から引きずりだされ手を逆手に取り登山ナイフで切りつけ外に連れ出された。首実験でしょう。十数人で色々と問いかけられ中国人街を一周、十メートルほどの橋を渡ると日本人住宅、やっと来たと思ったら背後から棍棒で頭部を一撃、腰を槍で一突きその場にバツタリと倒れ真っ暗だったが橋さえ渡れ

ばと必死で這おうとしたが動けなかった。

またガヤガヤと人の気配がしたと思ったら、路地に引きずられ棍棒で体中たたきつけられた。どのくらい過ぎたことか、早く病院に行かないと死んでしまうぞと担架で運ばれ大連駅近くの病院へ。医師は私の手に負えないから大きな病院へ行きなさいと言われたことは覚えていゝる。再び担架で大連病院へ向かった。途中で、かっいで下さっている方は大連瓦斯の職員であることを知りました。

病院が目にはいってから治療が終わってどのくらいたったのでしょうか。看護婦がどの誰か連絡先がわからず当惑しているところで我に帰り、名前と勤務先を教えるのがやっとでした。同僚が駆け付けてくれたので自分の傷がどうなのか聞いたら、頭を八針縫い胸と左手の切傷右肺右肩の貫通、上の前歯四本、ほかには体中打撲があるとのこと、銃撃を受けて病院にくるまで三時間以上も歩いたことも知らされた。

夕方に腹痛が起き結局腹部の切開手術、結果は急性腹膜炎、途中水を飲んだからと言われた。友の言うには助か

る見通しはないが万が一つの望みをもって先生にお願いしたとのことでした。

また、九月二日の朝、恵比寿町満鉄配給所に中国人が押し掛け日本人と言いつ争いとなり、ソ連兵の警備中に我々六人が群衆に巻き込まれて銃撃を受け、六人中三人は無事脱出。人は現場で、足を撃たれた人は病院で翌朝死亡と聞かされ、三日目はおのれかと思うと眠れなかった。けれども、病院の適切な措置、同僚の手厚い看護で七十二日間で退院することが出来ました。

退院は出来ても寒さに向かう時節である。仕事も出来ず三月まで休む。その間給料で三日分の米を買うのがやっと。売る物とて無く貨車の荷卸し後のほきだめの大豆や高粱を食べ、食うや食わずの連日で体調は思うように回復せず病人同様で、二十二年一月佐世保に上陸、単身だから帰れたが家族がいたら二度と日本の土を踏むことは出来なかったでしょう。

引き揚げ後は村役場に勤め現在退職し、子供も独立し年金生活を送っています。

無念、帰国時に日本で長男の死

群馬県 田中正吾

満州国独立のため、十九歳で孫呉に志願兵で入隊（独立守備歩兵第十四大隊）、昭和十二年三月除隊、同月興安省の省公署に勤務し、その後、興安西省錦州省義興公署、終戦時は錦州省公署に勤務しておりました。

召集で臨江に八月十四日入隊、翌十五日召集解除、当日、奉天に集合させられ、軍用貨車で出発しるとの指令で、同僚を含めて十六人が出発したが、撫順駅で降ろされ、その後は各人で帰宅することになり翌日撫順から奉天まで歩き、翌日早朝、十二人先頭グループに入って行進しました。

先頭である私達は六時間ぐらいい奉天に着きました。あとで話を聞くと、後続のグループは現地人による暴徒が、大きな鎌等で襲撃して物を取り上げたりして、また数人の人が殺されたとのことでした。